



路政春秋

綿蒲團きたる姿の

道普請

道路舗装に生ずる龜裂を如何にして防止し得べきか舗道工作上の大なる悩である。所が此頃綿の本場北米テキサス州の當局者の發表したる所を見ると綿蒲團は新装後三日間に今まで印皮から輸入して居るズツクよりも効力が多い、濕つた綿は湿度を保ち、舗道の龜裂を防ぐのに効果的なることが立證されたと實に以て名案であるといわれて居る。思案は寝て待つた譯でもなからう。

拾つて重い他山の石

法 令

北米ニューヨーク州道路委員アーサー・フランツがいふ言を聞くと

「スピドヴウエイと言はれてゐる廣い眞直な完装道路はドライヴァーに對し非常な誘惑となると見えて從來交通事故は最も直線的完装された場所で最も頻繁に起つてゐる、今後の道路政策は改良より寧ろ改悪に向ふべきだ」と。

改悪か改善か、同人の交通事故防止策は次の通である。曰く

- 一、スピド狂ひのドライヴァーの安全を保證する爲め道路は宜しくその幅員を狭め、凹凸を多くし且直線道路を出來るだけ避けること。
- 一、ドライヴァーの飲酒を避ける爲め街

注 意

本欄は讀者諸氏の利用に提供す、治安と風俗とを害し又は人身攻撃に渡らざる限り奇想天外的の寄稿を望む、一文は四百字位にて取捨は編輯手に一任、原稿は道路の改良編輯部宛のこと。

道沿ひの飲屋料理屋を撤去すること。
一、各所に監視人を配置し酒氣を滯びた者の自動車運轉を嚴禁すること。

一、精神健康者と見られる者も自動車運轉中他事に追抜かれた際全く氣狂ひひみた運轉をなす者あり、自動車常用者の定期的精神鑑定。
と拾つて重い他山の石？

洋畫家の眼に映つた街路樹は斯うだ

洋畫家伊藤慶之助氏が街路樹に就いて其の眼にうつつた所感を述べられて居る、それは斯うである。我國都會地で見ると街路樹は頭を壓へつけられて居る。歐洲の都會か

ら見ると街路樹が非常に小さくて貧弱で、ほとんど申譯だけにすぎないものが多い。殊に日本のやうに夏の濕氣が多くて暑さのげしい都會では都市の美觀ばかりでなく實用的にも歩行者には大きく房々と繁つた綠蔭が必要であらう。太い憎々しい電柱の下にちよつびり青い葉をつけた榮養不良のプラタナスの並木などを見てゐると少々なまけなくなつてくる。フランク博士にいはれるまでもなく、およそ現在の文明國で日本の都會ほど電柱の見事におし並んでゐるのは他にはなかなか見當らないであらう。しかしそれをすぐに片づけてしまふことも不可能であらうが、街路樹の成長をその電線の犠牲にしてしまふのも、まことに残念である。そのところ、電柱の顔も立つやうにして何とか工夫が出来ないものであらうか。主要道路の街路樹のある通りからは電柱をなくして脇道にそれて電線を通してはどうだらう、パリ、マドリッド、リコン、

ニースなど、それはその土地の風土と氣候に合つた樹を活用して美しい立派な並木道を作つて、街の美觀とともに、歩行者の心によるこびをあたへてゐる。神戸でも日本特有の柳、桐などを用ひて立派な線の深い並木道を作つてもらひたい。昨年、土佐の高知に遊んだが、あの附近特有のせんだんの並木道を見たが、その日本的で非常に美しい姿に感心した、これから暑さが厳しくなつてくると神戸にも街の美觀を兼ねた立派な大きい實用的な街路樹がほしくなつてくる。とにかくあの電線のところを頭をちよん切られた可愛らしい樹の並列をながめながら、頭に太陽の直射を受けて汗をふきふき歩かねばならぬ夏の歩道を思ふと憂愁を感じてくる。いと洋畫家ならぬ筆者達も同様の感がする、何んとか當局の方々に研究してもらいたいことである。

案内者の大責任？

國民子は云ふ。人氣不人氣の分岐點は：林前首相は極めて慎重に苦心しての談話だが時代とかけはなれて時代に觸れて居ない爲めに神かゝり、のりとして人氣がなかつた、近衛の夫れは淡々として容易に理解され新しい時代に觸れておる、國民の氣持と調子が合ふて居るので人氣がある。と國民の常識的政治感と縁遠い政治は一時力があると見られても恒久性がない、去りとて大衆國民の低級な認識に迎合せんとする政治は國家をして低級ならしむるのである。眞の政治家は國民の政治的認識力を洞察し其の理解を求めながら不知不識の裡に向上せしむるの指導力をもつものである。政治の水先案内の任に當る者の心得べきことである。又外國人の日本視察記を見ると往々吉原、オイラン、人力車、スパイ、腹切、フジヤマ、歌舞伎、天婦羅、相撲、キモノと云つた様な皮相淺薄な表面的の一部分を記するものがある。之れ視察者の罪

か案内者の不心得か外國人をして叙上のものゝ外に眞の日本の姿を認識せしめるの案内でなくて、案内者たる日本人自らが外國人をして其觀察を夫れ以上に出でしめざるの結果に外ならないと云ふべきである。

飛塵をなくなさしむる鋪石工法は？

三年後のオリンピック道路對策として東京市では千五百萬圓を以て道路修築を企てるが四圍の清況は確立的ならしむるを許されないので同市は待ち切れずに改良路線を假定し工事を進捗せんと意氣巻いて居るのだが、さて鋪装工法を如何にすれば飛塵を少からしむるのであるか？ 塵埃を吸收しても居られまい。夫れて市の衛生試験所
有本博士が調査したるに其の調査試験は日本では最初で世界的にも珍らしい。試験は比較的大きな有機性塵(糞、炭素、毛、纖維等)と極小の無機性塵(主として砂石)につ

いて、道路直上と二メートル位上に分けて行つた結果、大きい塵は道路直上小さい塵は高い所に多く、大きい塵の最も多いのはコンクリート、砂利道路、少いのは小鋪石、剛質アスファルト道路等、小さい塵の最も多いのは碎石被覆のコンクリート、砂利、剛質アスファルト道路で最も少いのは普通のコンクリート道路である。勿論人と車道と比較すると人道の方が遙に塵は少いが、塵の量は交通量の多少に正比例して多くなつてゐる、小さい塵の多い方が衛生上面白くないが、この調査の結果大小塵共比較的小くもつとも好成绩をおさめたのは小鋪石道路で、悪いと豫想されたコンクリートが比較的良好で、砂利道はもつとも悪かつた。との結果を得た。飛塵を少からしむる工法や如何。

何に不満で此一言か 尤もぢや尤もぢや

或地方での官衙で用務もなささうな人間がうよよ々々雑談に花を咲かせて居るを見たが之れが税金の落ちる所かなと思ふと涙が出ると思はれて……机の上で道路が美しくなるとは思はれない。又理論だけで國家の躍進は望む事が出来ない。本當にその仕事に従事する者が生活線以下の薄給であつては働く方も鈍るのではないかと吾々は思考する。尙吾々の汗の結晶は机の上の書損じの紙と仕度くはない。道路に敷かれる砂利の一粒となり、打下される鍍やスコップの數多く力強いものとなつたい。斯くしてこそ躍進の實を結ぶのだと思ふ。然らざれば如何に聲を大にして當局が叫ぶとも、机上の空論に終るであらう。彼等に生活の安定を與へよ。と御尤も〜。

今でも斯んな尊い吏員がある。心強いネ

十七年間缺勤なし一日十七時間精勵し

公吏があると聞いた丈けでも心臓の高鳴りを禁じ得ないことである、事實は斯うだ。所

はならぬ存在である。

は秋田縣である。能代町役場會計書記厨川實臣氏は激増する事務を殆ど一人で處理し、毎年三十餘萬圓の出納事務を一錢遣へ

ハア誰に聞きましたかね、別に特別な理由があるわけではなく單にこの建物のわるさから来る餘儀ない始末なのです、この役場は建物が悪いので午後には内部がまつくらになり事務が執れないですよ、

ずやつてゐるが、同氏は一日の中で能率があがるのは午前四時頃が一番よいとあつてまだ薄暗いうちに飛起きて精勵してゐる、この勤務振りを知つてゐる人は小使さん位

です、まあ朝には一番仕事がいやい、し夜も静かですよ、仕事が目白かつて？ それは私が居なければこの激務を誰もやる人がないでせうから仕方がありませんよ……

である。一仕事すんでから朝飯に一寸歸宅し一日中ねばり續け更に夕食後も九時頃までコツ／＼とやつてゐる人が知らうが知る

氏は、その超勤勉振りをこともなげに、かう語るのだ。

まいが、町長から認められようが認められまいが全く職務は天職と信じ眞に樂天知命の精進振り、今頃の若い人達には思ひも

かくもあれかし、

及ばぬ、この有様は氏が役場入りをしてからずでに十七年間、ちつとも變らぬのだ、

斯うもありたし

去る二月には、勤續者として町長から表彰されたが、この精進振りを表彰者も知るや

近衛内閣成立祝賀晩餐會の席上郷男爵の要請的挨拶と近衛首相の答辭とは寔に吾意を得たりとの感がある。事聊か政路とは縁

知らずや——同役場の生字引一日もなくて

が少ないが知つておくべきものである。郷男の挨拶：◇現下我國において經濟、政治、社會の各方面に目立つものは革新と現狀維持の二大潮流であり、この點については私は時運の推移變遷に對處して行くべきであると信ずる、もしこれを怠るか若くは一時の彌縫糊塗に終らしめる時はおそるべき結果を招来するのである、今日の時局に際しては徒らに舊慣墨守の弊に陥ることなく相當程度の革新的方策の採用もまた必要であると思ふ、もとより適當に急激な變革は混亂を惹起するもので極力之を避けねばならないが、現狀維持を以てすべて是なりとは考へぬ、要は矯激に失せず姑息に流れず中庸を得たる革新的政策により健全なる國家の進運發展を導かれんことを切望する。

◇次に政府においては財政經濟に關し生産力の擴充、物資需給の調整國際收支の適合の三原則を掲げ併せて日滿一體の經濟政策確立を闡明せられ現下わが國內外の諸情勢

を

に對應して政府の積極的經濟政策の基調を明示したことは時期を得たる措置である、し、かし乍らひるがへつてわが國の經濟界一般の現状並にその將來について検討すれば、貿易、金融、物價、農村の諸問題、對滿洲國經濟調整の問題等幾多の解決至難な問題を包藏してをり、これ等は密接に相關聯してゐる關係上適當に按配調整し、以て今彼の豫算編成に善處し財政經濟政策をたてるには容易ならざる困難が横たはつてゐる。

◇これに關し二つの事柄について内閣諸公に對し希望したい、その一は、現政府において各部門を通ずる積極的綜合的國策を樹立し實施するに當つては財政經濟に關する限り總て現實の國力に順應することを根本の建前とし、他方將來の國力増進を確保すべき民力の發展涵養につき萬全の考慮を願ひたい、その二は今後國策の必要上産業、貿易通貨及び金融に關する諸般の關係において統制の強化擴大はさげ難きこととして

もわが國の國情並に國民性にかんがみ出來得る限り自治統制を原則とする統制たらしむることにつき配慮を願ふ。

近衛首相答辭……郷男のお言葉には至極同感であり、十分希望に副ふやう努力したい、目下各方面に相剋對立の状態が見られることは國家の前途の上より見て深憂にたへない、故に今回組閣の當初に各方面の相剋摩擦の状態を緩和し、小異をすて、大同につくといふ風潮を誘導することを内閣の使命とし國民と手を握つて行きたいと申ししたが、ことに經濟方面の事は複雑微妙の關係にあり財界の援助なくしてはやつて行けないから、財界の人々も政府のなすところをたゞ批判するだけでなく、共に國難に當るといふ氣持で援助を願ひたい。

ありやなしやの珍

聞奇譚 (5)

○九段坂上靖國神社の燈明臺の由來

靖國神社參拜休憩所の豊原繁尾刀自(七十六歳)の話は斯うである。IIア、あの燈明臺の事ですかあの當時(明治十年頃)はあの燈籠のあつた偕行社附近には六十人も神主たちの住む神主長屋がありました、どうして六十人も神主さんたちがゐたかといへばこの六十人は元は駿河遠州の神主たちで御維新の際の勤王派のために、働いたために、徳川方に容れられず、國を追放されたこの人々のために、いはゞお上で神主の失業救済のために、こんなに多勢おいたものでした。……この神主さんたちがこの燈明臺に上つては毎日灯を入れてゐましたが、當時は品川灣は一望の中、沖の白帆の彼方には房總がかすかに浮んでゐた……この時海を望む神主さんの姿には望郷の心がにじみ出てゐるやうで、夕暮時になるとその故郷を思ふ氣分はいまでもあり……私の目に浮んで來ます、それからこの燈籠の石のつみ方は非常な名作で全國の石工がい

つも感嘆してこれを眺めてゐた場面を思ひ出しますがそれを作つた人の名は思ひ出す事が出来ません……。その昔は房總沖から魚河岸へ漕ぎ寄せる漁船は神田明神境内の大銀杏と神田明神の常燈明臺を目當にしてゐたものでさうですが、九段の燈明臺が出来てからは神田明神の方は間もなくとり毀ちとなつてしまつたといひます。昔の灯はもつと赤く何んだかもつと暖かなやうでした。

○炭都飯塚の昔を知る古文書、享保五年（二百十七年前）に作成したものでこれらの古文書は何れも今日の土地臺帳や年貢米の臺帳が主で、「御免用諸普請軸帳」は當時の飯塚村の土木工事の一覽表で、橋梁の細部の用材や使用人夫、大工の數まで細大漏らさず記載されてをり當時の土木工事を髣髴とさせる有力な參考資料で目下山本土木課長の手許で種々調査を進めて居る。

○板垣伯の意見書行李の底から

「板垣死すとも自由は死せず」と喝破した自由民権の唱導者故板垣退助伯が明治二十一年伯爵を授けられた直後の同年八月十二日の國難を嘆き畏れ多くも明治大帝に奉つた意見書草案が幾多の運命にもてあそばれ嘉義市在仕の一職工の行李から明るみに持ち出され時節柄好話題になつてゐる。

右意見書は和紙二十九枚五十八頁よりなり時の政府の政策を暴き自由民権思想に立脚しての熱烈な改革意見が盛られ早く國約の憲法を領し天下の正義を容し輿論のあるところを探つて速かに苛税を減じて人體の休養をはかり責任内閣の實をしき民怨を除かば内亂それ避くべく而して上下意を同じうし君臣力を戮するを得ば外寇また患ふるに足らず國家萬世の大計こゝに至つて初めて整理するの期あるべきなりと結んでゐる。この意見書が現在嘉義市新富町島崎信一君の所有に歸するまでには幾多の紆餘曲折を経てをり、話は遡るが、同君がかつて

鹽水港製糖に奉職してゐた際、落ちぶれて同家に寄宿してゐた友人が死際に「かたみ」として残すべきものはないがこれは明治三十三年高雄で一友人がマラリヤに罹つて死際にかたみにもらつたものであると運命の皮肉さを笑ひながら瀕死のとき同君が貰つたものだといふ。その後同君はなんの氣なしに行李の一隅に置き忘れたまゝ十六年も過ぎた今日になり発見したもので一部鑑定家は故板垣伯の直筆であると稱してをり、藩閥政治を打倒し立憲政治の礎石として逝いた故板垣伯のこの意見書は政界非常時の今日、一つの指示を與へるもの話題を賑はしてゐる。

○幕末の傑僧月性の手紙か
幕末防長が生んだ傑僧月性の性格を躍如と物語る足る月性筆の手紙二通がこのほど下關某家から發見された、僧月性は周防國鳴戸村妙圓寺の住職吉田松陰と親交あり、天保、嘉永、安政のころ、説教壇上におい

て海防の急務を説き勤王精神作興を絶叫、一方また詩をつくり當時京都方面では詩人としてきこえてゐたが毛利藩では「勤王の傑僧海防僧などと呼ばれてゐた。男子立志出郷關學故不成死不還の漢詩も彼の作である、この月性が或る時厚狭の枝村樸之允といふ名士から書をのまれたがこの時枝村がその御禮のつもりで金一封を贈つた、生來潔癖、金錢に淡白な月性はこれを甚だ心外としつむじをまげてしまつた、そして枝村へ宛てゝその金を突つ返したが、その時の書面がそれで、文面は、

拜啓狂生、生來潤筆をもらひ候て書をかき候事未曾有之因て散櫻の一封、其儘返璧仕候云々。

そこで枝村は自分の不躰をわび、今度は硯一個を贈つて改めて書を頼んだ、これで月性のつむじもやうやくくなほつたらしく今度は、

好硯一枚御惠贈御芳情有難奉謝候、御斷

可申管に候へども毎度の御贈度に御返申上候も不致に存じてこの度は御頂戴仕申上候云々。

と返書した、この二通の手紙が枝村家の親族の手に渡つて保存されてゐたものとA紙が傳へて居る。

夏季混題

初 聲

藪少すり去る風強し夏の月

蛇を逐ふ金剛杖や朝の山

頂上を極めて嬉し御來迎

桃割くや核の紅鮮かに

桃を割く掌の力かな何賭けむ

女房の眼に似てこけし涼しけれ

こけし鳴らせば河鹿も鳴て縁の關

こけし割る木の香の窓や青嵐

蜩かく帆遠く去る青嵐 巴 藤

夕釣りの鮎見すに聞く遠河鹿

演習の待機も憂しや夏野原

慰靈祭の人散る里や土用波

山百合の根に蟹を見る清水かな

避暑に來て悲戀の墓に百合の花

未知の客と蚊帳に語るや鳥の宿

床にまでさす月を蚊帳に獨り見る

亡き人の姿をうつら蚊帳の人